

公開講演会（岡山大学文学部・岡山大学大学院社会文化科学研究科・岡山大学法学部共催）  
「日本のフェミニズムと母性問題 — 平塚らいてうを通して」

日時：2008年3月6日 14:00-16:00

場所：岡山大学社会文化科学系総合研究棟 共同研究室

講演題目：「日本のフェミニズムと母性問題 — 平塚らいてうを通して」

講演者：クリスチヌ・レヴィ（ミシェル・ド・モンテーニュ＝ボルドー第3大学・日本  
学術振興会外国人招聘）

参加者：36名

#### 講演要旨

本講演は、「平等の理想：兆民とらいてう」と題するレヴィ氏による連続講演会の第1日目にあたるものであった。講演は日本語で行われたが、事前にフランス語の原稿が送られ、それを本学卒業生・中島和美氏（岡山大学・くらしき作陽大学非常勤講師）が和訳し、あわせて資料も準備し、当日配布された。

当日は、本学関係者のみならず、多くの一般聴講者が出席し、盛況であった。講演に先立ち、倉地文学部長の代理として辻副学部長より挨拶が行われた。

講演の目的は、らいてうの自伝『元始、女性は太陽であった』の検討を通じて、フェミニズムの理想と母性との関係を考えることであった。まず、らいてうが目指した理想の形成背景（学生時代の禅の経験、進路を巡る父親との葛藤、等）とその独自性（ヨーロッパのフェミニズム運動と異なり母性の意義を認めること、等）が紹介された。

続いて母性についての出産以前と以後のらいてうの考え方の違いが紹介された後で、女性の解放、個人としての自己実現という理想と、子供を産み育てるという母性との間の葛藤に対して、らいてうは、1) 母性への報酬、2) 保育園・託児所の利用、という解決法を示したことが紹介された。

さらに、「らいてうの考えは、近代日本において核家族という新しい家族形態が広まっていく中で、そこにどのように統合されるのか」、という問題意識から、近代日本における女性の地位が、どのように変わっていったのか（例えば、良妻賢母からキャリアウーマンへ）が検討された。また現代においても、子育てと仕事を通じての自己実現との間の葛藤は、パートタイム労働とフルタイム労働のいずれの形をとるにしても解決されていないことが、ドイツの例も引きながら指摘された。

その後、ギリシャ・ローマから中世を経て現代にいたるヨーロッパの「母性」の歴史を概観しながら、女性が労働の悪条件の解消を目指し、母性の保護を訴え、出産休暇制度などさまざまな権利を獲得し、母性の選択の自由を今日手に入れるまで、どのような苦難を経験したか、論じられた。

最後に、現代では、医学面や子どもを産むか否かの選択、またいつ結婚して、いつ子どもを作るかなどの決定に関する自由が進んだとはいえ、母性自体をどう認めるかという問題はいまだ解決していないことが指摘され、さらに、女性が個人として自己実現を求める事と、同時に母親としての生涯を営むこととの間の矛盾が解決されないまま残る現代において、らいてうが母性保護を訴えて、この矛盾を乗り越えようとし、実生活の苦悩に真摯に向きあった姿勢は現代的意味を持つものとして評価できるのではないか、と結論づけられた。

講演後、司会の木之下教授、共催する本学部「ジェンダー教育プログラムの立案と実施に関する学際的研究」グループの松本准教授などから質問があり、活発な討議が行われた。特に、現代の日本では出生率が低下しているのに対し、フランスにおいて向上しているのはなぜなのか、また、研究者といったアカデミックな職業につく女性の割合が日本とフランスで格段に違うのはなぜなのか、といった問題が論じられた。